

2016年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
意を決すべく寒紅を真一文字  
吹き晴れし富士真っ向に初山河  
ホットレモンティーに癒えゆく春の風邪  
踏みこはす時七彩に薄氷  
ささ波を生みつつ解ける薄氷

横浜 稲田 涼子  
雪晴の富士に衰ふ目を洗ふ  
ほぐれ初む梅に二月の曇り癖  
せせらぎの音艶めかす猫柳  
風花や宙にのみある生命美し  
処女雪のためらひ踏めば軋り哭く

藤沢 藤田 富子  
独り居の急くこともなく年用意  
冬帽を深くかぶりて画架立つる  
小恙を心に生きて十二月  
名も知らぬ雑木なれども冬もみぢ  
冬ざれて花園の荒れ放題に

さいたま 宮崎 美智子  
句材にと巡る公園冬日落つ  
クリスマスプレゼント何時孫メー丸  
冬初め静もり部屋に聴くタンゴ  
熊手市いなねばならぬほどでなし  
好みなる書体統一書きをり小春かな

町田 小森 まさひこ  
クリスマスソング達郎クロスビー  
喧噪を曲がりし路地の白朮の火  
豊穣の海に雲這ふ野水仙  
一の宮の奥に漏れ溢れいし淑気  
大どんどの海を染めたる大焔

2016年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
天を指すはやさアスパラガス畑  
茎立や野菜畑は花畑  
長き過去短かき来昭和の只  
髪風船とはたたかれてたたかれて  
重き殻負ひ寄居虫の逃げ上手

横浜 稲田 涼子  
句が友の余生はまさに春の風  
白子干す浜を一望出来る場所  
地の神の覗き穴めく雪の隙  
啓蟄のうごめく気配の地中より  
古寺の静謐(せいひつ)をたたふ竹の秋

藤沢 藤田 富子  
厨ごと手早く済ませ糸編む  
寺めぐり電車乗り降り四温晴  
紅梅の日に輝きて枝垂れり  
春浅し手を打ち池の鯉を呼ぶ  
一望の海風てをり島の春

さいたま 宮崎 美智子  
万の数口ビーに揺れて吊し雛  
東の間を水脈にゆられて帰る鴨  
千代紙を売る店先に花吹雪  
春寒し吹き寄せらるるすすめかな  
節の忌机上はいつも整理され

八王子 石井 蓉子  
この風は春の扉を開く音  
子等遊ぶ休日公園春日和  
アネモネの花屋に溢れている朝  
春の雨あがり名草のうれしさう  
早朝の散歩足裏の名残雪

町田 小森 まさひこ  
霾(つちふる)や東京タワーを煙らせて  
春泥の靴跡路地を抜けてをり  
装ひに色も加はへて山笑う  
年長が黄帽子かぼう新学期  
奥伊豆の流れ巧みに山葵

2016年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
白鷺をふはりと浮かべ大南風  
青鷺の鳴いて宮居の風乱す  
短夜の眠りの端にある思案  
かなぶんや第二芸術論佳境  
優曇華や待つともなしに待つ知らせ

藤沢 藤田 富子  
花冷えやたしかめらし友の無事  
風に鳴る墓所に水子の風車  
浜風を受けて弥生の絵画展  
春眠しほど良く揺れるバスの旅  
大仏の温顔拝す四温晴

さいたま 宮崎 美智子  
金星に見とれ足止め春の道  
東おどり芸妓と残す写真かな  
咲き満ちて空を覆ひて花辛夷  
大人びた挨拶われに新入生  
花筏向けて漕ぎ出す舳先かな

八王子 石井 蓉子  
猫の子の瞳の中に季節あり  
雨上がり若葉の香り吸ひ込みぬ  
春風や私は私のままで良い  
猫の背に光り返へして春の行く  
もの想ふ柿の若葉のまぶしさよ

町田 小森 まさひこ  
山の辺の曲がり角来て竹落葉  
茄子植ゑて狭き畑に色生まる  
細き足絆に動いて三社祭  
国宝の大屋根新樹に浮かび立つ  
鉄線花千住の路地は細くあり

2016年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
生返事して金魚へと目をそらす  
優美なる尾鰭をゆがめ金魚玉  
寂しくて金魚うれしくても金魚  
泡ひとつ吐いてむかうをむく金魚  
真っ直ぐに泳ぎにくさうなる金魚

藤沢 藤田 富子  
展望の空はるかなる青嶺かな  
その昔庄屋跡とや菖蒲園  
寝不足になほ短夜のめざめかな  
老鷺の谿にこだまの心地よく  
ひと口に煮あなごの寿司やはらかし

さいたま 宮崎 美智子  
仙人掌の盛り双子の生まれけり  
朝な夕な眺む青紫蘇誰にやろ  
走り蕎麦打つ友囲み皿並べ  
お人よし押し切られ買ふ単物  
堀辰雄の愛でし信濃路緑濃し

八王子 石井 蓉子  
切りすぎた髪が気になる花ポピー  
仕事がねちょっときついのアマリリス  
夏の花光の中にりんと咲く  
過去なんて忘れてしまえ若葉風  
故郷の風なつかしく桜桃忌

町田 小森 まさひこ  
おみくじを結ぶ綱垂る梅雨湿り  
猛暑日の道路白線歪みたる  
手をかざすことがお礼と夏炉の火  
平原の焼けし大地に草を干す  
霧中より傾きて来る昆布船

2016年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
もろこしの香の誘惑に歯が負ける  
変幻の雲の行方を追ふ厄日  
石榴裂け心ならずも嘘をつき  
五号車の二番E席十三夜  
紅葉狩吊橋なんて怖くない

藤沢 藤田 富子  
風鈴のはたと止みたる風のみち  
新涼に気を取り直す怠けぐせ  
揚花火見ゆる角度に邪魔なビル  
走馬燈めぐり来し方俣ぶかな  
日雷待たれる雨もなく去りぬ

さいたま 宮崎 美智子  
蹲踞(つくばい)に寄り添ふている濃紫陽花  
川床料理差しつ差されつ更けてゆく  
手を取りて二階囀を見上げをり  
緑さす石の地蔵に無事願ふ  
仙人掌の盛り双子の生まれけり

八王子 石井 蓉子  
思い出が笑顔の中に日焼けの子  
忘れたくた忘れたく髪洗ふ  
朝雲の一日ショパンではじまりぬ  
携帯の電源切って昼寝かな  
走り寄る子犬の瞳に秋の空

町田 小森 まさひこ  
初露や移ろう日々に埋もれし  
雲上の菩薩笛吹く良夜かな  
きりぎりすむせ返りたる草生きれ  
芒原多摩横山に続きたる  
踏切に秋の灯一つ灯りたり

2016年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
初霜に天地きらめく朝かな  
叢雲は神慮の翳り十三夜  
ときめきを固くとざしてゐる冬芽  
あきらめし夢の数ほど木の葉髪  
今も残る心の疵に染む袖湯

藤沢 藤田 富子  
秋高し観音の守護いだだきて  
硫黄の香ただよふ湯船秋の暮  
神の杜静寂の中鴉高音  
天候に一喜一憂運動会  
身に入むや互ひの老を思いやり

さいたま 宮崎 美智子  
山里に自然薯そばを味はいぬ  
高尾山登る園児等秋高し  
爽やかやしシルバー展へ一句かな  
村社掃かれし庭に一葉落つ  
冬越の好むスマレや濃紫

八王子 石井 蓉子  
秋雨の涙色して降り止まず  
ぬくもりの消えし朝や冬に入る  
鳥一羽曇る空ゆく暮の秋  
淋しさを打ち消している虫の声  
空を見る子犬眼に秋の空

町田 小森 まさひこ  
横山の端空に溶け冬に入る  
地震の地に畏れ畏れて神渡  
動くもの動かしままに山眠る  
日短や人ホームにあふれていて無言  
冬の空空色にして透明に